

【B年】待降節第2主日(2022年12月4日)

【旧約聖書日課】イザヤ書 55章1～11節

- 1 渇きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい。
銀を持たない者も来るがよい。
穀物を求めて、食べよ。
来て、銀を払うことなく穀物を求め
価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。
- 2 なぜ、糧にならぬもののために銀を量って払い
飢えを満たさぬもののために労するのか。
わたしに聞き従えよ
良いものを食べることができる。
あなたたちの魂はその豊かさを楽しむであろう。
- 3 耳を傾けて聞き、わたしのもとに来るがよい。
聞き従って、魂に命を得よ。
わたしはあなたたちとどこしえの契約を結ぶ。
ダビデに約束した真実の慈しみのゆえに。
- 4 見よ
かつてわたしは彼を立てて諸国民への証人とし
諸国民の指導者、統治者とした。
- 5 今、あなたは知らなかった国に呼びかける。
あなたを知らなかった国は
あなたのもとに馳せ参じるであろう。
あなたの神である主
あなたに輝きを与えられる
イスラエルの聖なる神のゆえに。
- 6 主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。
呼び求めよ、近くにいますうちに。
- 7 神に逆らう者はその道を離れ
悪を行う者はそのたくらみを捨てよ。
主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。
わたしたちの神に立ち帰るならば
豊かに赦してくださる。
- 8 わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり
わたしの道はあなたたちの道と異なりと
主は言われる。
- 9 天が地を高く超えているように
わたしの道は、あなたたちの道を
わたしの思いは
あなたたちの思いを、高く超えている。
- 10 雨も雪も、ひとたび天から降れば
むなしく天に戻ることはない。
それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ
種蒔く人には種を与え
食べる人には糧を与える。
- 11 そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も
むなしくは、わたしのもとに戻らない。
それはわたしの望むことを成し遂げ
わたしが与えた使命を必ず果たす。

【使徒書日課】

ローマの信徒への手紙 15章4～13節

- 4かつて書かれた事柄は、すべてわたしたちを教え導くためのものです。それでわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができるのです。
- 5忍耐と慰めの源である神が、あなたがたに、キリスト・イエスに倣って互いに同じ思いを抱かせ、⁶心を合わせ声をそろえて、わたしたちの主イエス・キリストの神であり、父である方をたたえさせてくださいますように。
- 7だから、神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい。⁸わたしは言う。キリストは神の真実を現すために、割礼ある者たちに仕える者となられたのです。それは、先祖たちに対する約束を確証されるためであり、⁹異邦人が神をその憐れみのゆえにたたえるようになるためです。
- 「そのため、わたしは異邦人の中であなたをたたえ、あなたの名をほめ歌おう」と書いてあるとおりです。
- 10 また、
「異邦人よ、主の民と共に喜べ」と言われ、
- 11 更に、
「すべての異邦人よ、主をたたえよ。
すべての民は主を賛美せよ」と言われています。
- 12 また、イザヤはこう言っています。
「エッサイの根から芽が現れ、
異邦人を治めるために立ち上がる。
異邦人は彼に望みをかける。」
- 13希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とであなたがたを満ちし、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせてくださるよう。
- 【福音書日課】ルカによる福音書 4章14～21節
- 14イエスは“霊”の力に満ちてガリラヤに帰られた。その評判が周りの地方一帯に広まった。15イエスは諸会堂で教え、皆から尊敬を受けられた。
- 16イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。17預言者イザヤの巻物が渡され、お聞きになると、次のように書いてある箇所が目にとまった。
- 18「主の霊がわたしの上におられる。
貧しい人に福音を告げ知らせるために、
主がわたしに油を注がれたからである。
主がわたしを遣わされたのは、
捕らわれている人に解放を、
目の見えない人に視力の回復を告げ、
圧迫されている人を自由にし、
19 主の恵みの年を告げるためである。」
- 20イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。21そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書 55章1～11節

- 1 さあ、渇いている者は皆、水のもとに来るがよい。
金のない者も来るがよい。
買って、食べよ。
来て、金を払わず、代価も払わずに
ぶどう酒と乳を買え。
- 2 なぜ、あなたがたは
糧にならないもののために金を支払い
腹を満たさないもののために労するのか。
私によく聞き従い
良いものを食べよ。
そうすれば、あなたがたの魂は
豊かさを楽しむだろう。
- 3 耳を傾け、私のところに来るがよい。
聞け。そうすればあなたがたの魂は生きる。
私はあなたがたと永遠の契約を結ぶ。
ダビデに約束した、確かな慈しみだ。
- 4 見よ、私は彼を諸国の民への証人とし
諸国の民の指導者、司令官とした。
- 5 見よ、あなたが、知らない国民に声をかけると
あなたを知らない国民が
あなたのもとに走って来る。
これは、あなたの神、主のため
あなたに栄光を現わした
イスラエルの聖なる方のためである。
- 6 主を尋ね求めよ、見いだすことができるうちに。
主に呼びかけよ、近くにおられるうちに。
- 7 悪しき者はその道を捨て
不正な者は自らの思いを捨てよ。
主に立ち帰れ
そうすれば主は憐れんでくださる。
私たちの神に立ち帰れ
主は寛大に赦してください。
- 8 私の思いは、あなたがたの思いとは異なり
私の道は、あなたがたの道とは異なる
——主の仰せ。
- 9 天が地よりも高いように
私の道はあなたがたの道より高く
私の思いはあなたがたの思いより高い。
- 10 雨や雪は、天から降れば天に戻ることなく
必ず地を潤し、ものを生えさせ、芽を出させ
種を蒔く者に種を、食べる者に糧を与える。
- 11 そのように、私の口から出る私の言葉も
空しく私のもとに戻ることはない。
必ず、私の望むことをなし
私が託したことを成し遂げる。

ローマの信徒への手紙 15章4～13節

4 これまでに書かれたことはすべて、私たちを教え導くためのものです。それで私たちは、聖書が与える忍耐と慰めによって、希望を持つことができます。5 忍耐と慰め〔別訳→励まし〕の源である神が、あなたがたに、キリスト・イエスに倣って互いに同じ思いを抱かせ、6 心を合わせ、声をそろえて、私たちの主イエス・キリストの父なる神を崇めさせてくださいますように。

7 だから、神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい。8 私は言う。キリストは神の真実を現すために、割礼のある者に仕える者となられました。それは、先祖たちと交わした約束を揺るぎないものとするためであり、9 異邦人が神をその憐れみのゆえに崇めるようになるためです。

「それゆえ、私は異邦人の間であなたに感謝し御名をほめ歌おう」と書いてあるとおりです。

10 また、

「異邦人よ、主の民と共に喜べ」

と言われ、11 さらに、

「すべての異邦人よ、主を賛美せよ。

すべての民よ、主をほめたたえよ」

と言われています。12 また、イザヤはこう言っています。

「エッサイの根が興り

異邦人を治めるために立ち上がる。

異邦人は彼に望みを置く。」

13 希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とであなたがたを満たし、聖霊の力によって、あなたがたを希望に満ち溢れさせてくださいますように。

ルカによる福音書 4章14～21節

14 イエスが霊の力に満ちてガリラヤに帰られると、その噂が周り一帯に広まった。15 イエスは諸会堂で教え、皆から称賛を受けられた。

16 それから、イエスはご自分の育ったナザレに行き、いつものとおり安息日に会堂に入り、朗読しようとしてお立ちになった。17 預言者イザヤの巻物が手渡されたので、それを開いて、こう書いてある箇所を見つけられた。

18 「主の霊が私に臨んだ。

貧しい人に福音を告げ知らせるために

主が私に油を注がれたからである。

主が私を遣わされたのは、

捕らわれている人に解放を、

目の見えない人に視力の回復を告げ、

打ちひしがれている人を自由にし、

19 主の恵みの年を告げるためである。」

20 イエスは巻物を巻き、係の者に返して座られた。会堂にいる皆の目がイエスに注がれていた。21 そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・12月4日「待降節第2主日」の日課主題は「旧約における神の言葉」。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、神の言葉への信頼を教える預言の箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、神の言葉が異邦人にまで及ぶ救いを告げていることを述べる箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、主イエスが故郷ナザレの会堂の安息日礼拝で朗読と教えをされた逸話の箇所の前半部。

旧約日課(イザヤ 55 章より)

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典「後の預言者」の第一に置かれる預言書で、正典「預言者」全体を基礎づける。39章までは、紀元前8世紀末の南王国で宮廷預言者として活動した歴史的預言者イザヤの預言集と活動を伝えるものであるのに対して、40章以下は、前6世紀のバビロン捕囚と解放およびユダヤの地への帰還という時代背景で語られた「イザヤの後継者を自認する預言者ら」による預言集としてまとめられたと考えられている。近年は一般に、39章までを「第一イザヤ」、40章以下を「第二イザヤ」などと呼んで区別する。

・「第二イザヤ」を著した祭司=預言者集団は、歴史的預言者イザヤを一つの模範とする一方、預言者個人のカリスマ性ではなく、預言者の告げる「神の言葉」への信頼をより強く主張する神学的立場に立っていたと考えられる。かつて宮廷預言者の後ろ盾ともなり得た王国・王権および神殿が失われた時代に、祭司=預言者が依拠し得た権威は、歴史的に継承してきた「神の言葉」を置いて他になく、正典「律法と預言者」の編纂と絶対化は、彼ら自身の活動に基盤を据えるために不可欠であっただろう。元来、「神殿」や「聖所」で祭司集団によって継承されてきた「神の言葉」は秘儀的な要素が強く、必ずしも文書化されず、あるいは文書化されても門外不出の扱いがされたと考えられる。王国時代、祭司・預言者の告げる言葉が公式に記録されたのは、王国祭儀・宮廷祭儀として執り行われた場合であり、それは、「預言者〇〇の預言の書」というような王宮文書として宮廷書記官によって作成され、保管されたと考えられる。「第一イザヤ」は、そのような王宮文書として作成されたものが元になっていると考えられる。一方、「第二イザヤ」は、ダビデ王家は存続していても王宮や王立神殿など王国としての営みが断たれた時代に、祭司=預言者集団が、王権にも神殿祭司制度にも依らずに自律的に「神の言葉」の告知者であろうとすることから生み出された正典「律法と預言者」の権威を神学的に基礎づけようとする試みの一環として著されたものと見ることができる。

・日課箇所では、「神の言葉」を人にとって不可欠な食物に喩えている。このような喩えで「神の言葉」を位置づけることは、「申命記」にも見られる(申 8:3 など)。

使徒書日課(ローマ 15 章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、使徒パウロが未訪のローマの教会共同体に宛てて記した書簡で、自らのローマ訪問計画を告げ、その後のエスパニア伝道への協力を働きかけるために記されている。パウロにとって、ローマは未訪の地ではあっても、彼自身のコリント伝道でローマ教会共同体に属する少なからぬ信者と交流を持っていたと考えられる。「使徒言行録」18章がパウロのコリント伝道の支援者として伝えるユダヤ人夫妻アキラとプリスキラも、ほぼ間違いなくローマの教会共同体出身の信者であったと考えられる。また、「コリントの信徒への手紙一」1章で彼が触れているように、コリントの教会共同体には早い段階で使徒ペトロ(ケファ)が関わるようになっており、コリントの教会共同体を通してパウロはローマの教会共同体との繋がりを持つようになっていたと考えられる。別の見方をすれば、ローマの教会共同体では、パウロがコリントの教会共同体との間で必ずしもうまく関係を築けなかったことが知られていたはずである。そこで、パウロは、ローマ訪問を前に、あらかじめ自分の立場を伝えておく必要に迫られ、慎重に言葉を選んで、この書簡をまとめたと考えられるのである。

・日課箇所は、本書簡でパウロが述べてきた本論の末尾にあたる。ここでパウロがまず強調しているのは、彼自身の主張が、「かつて書かれた聖書」の告げる「神の言葉」を根拠にしている、という点である。加えて強調しているのは、「キリスト」が「割礼ある者たち」に仕えられたように、「割礼ある者たち」が「異邦人」を受け入れ仕える、という福音宣教の基本構図で、本書簡全体で論じてきた事柄の要約である。この、いわば「ペイ・フォワード Pay it forward」の観念が、後の時代の教会がどこまでも宣教対象を拡げていくに際しての動機付けとして働いたとも言えるだろう。

福音書日課(ルカ 4 章より)

・日課箇所は、主イエスが故郷ナザレの会堂礼拝で朗読と説教の奉仕をされた逸話として描かれており、「ルカ」はこれをガリラヤ宣教の初期、いまだ弟子を従わせられる前のこととして描いている。主イエスが故郷ナザレに帰郷された際に受け入れられなかったという逸話は、「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えており、「ヨハネ福音書」も形を変えて(実弟たちに認められない逸話)伝えている(ヨハネ 7 章)。「ルカ」に特徴的なことは、この逸話で具体的に主イエスが朗読された聖句を示したうえで、これに基づいた主イエス御自身の説教(使信)を伝えていることである。これが実際に行われたことを正確に告げているかどうかは別にして、「ルカ」は、ここに主イエスの「聖書」=「神の言葉」に対する姿勢と、それを主イエスと結びつけた聖書解釈の道筋を提示している。

・ここで朗読された箇所として引用されるのは、「イザヤ書」61:1~2 の御言葉。

・ユダヤ教会堂(シナゴグ)は、神殿によらずに礼拝を営む機関として、バビロン捕囚期のバビロンで始まったものが起源とされ、ヘレニズム時代以降、広まったとされる。会堂は、安息日礼拝だけでなく、日常的に「律法」の学校として子どもらが学ぶなど、教育機関としての役割を担ってきた。そうであればこそ、代々受け継がれてきた慣習や聖書解釈の立場などに対して、容易に異を唱えることは難しかっただろう。主イエスへの反発には、そのような背景もあったと考えられる。

来週の誕生日 (12月4日～10日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-231 番「久しく待ちにし」(= I 94)は、9世紀のアンティフォン(交唱聖歌)に基づいて13世紀ごろに再構成、18世紀に現在の形になった。原曲は15世紀フランスの女子修道院の歌集に見られる。
- ・21-241 番「来たりたまえわれらの主よ」は、「Swiss Noel (Noël Suisse)」という曲名で16世紀以来、スイス・フランス国境地方で歌われてきた「ノエル」のひとつ。フランス語圏では、降誕節に演じられた降誕劇のためにさまざまな「ノエル」が歌われてきた。
- ・21-232 番「神のみ子は世に来られた」は、ボヘミア兄弟団の讃美歌で、作曲のヴァイセが編纂出版した1544年版同団讃美歌集に作作者不詳で収録されたもの。ヴァイセは、フランシスコ会修道士で、宗教改革に共鳴してボヘミア兄弟団に参加、ルターとも親交があった人物。この讃美歌に基づいて、バッハも数曲を作っている。
- ・21-240 番「主イエスは近いと」(II 48「主イエスは近しと」)は、古代ミラノ司教アンブロシウスの作詞とも言われるが、6世紀の作作者不詳の詞。19世紀にモックによって作曲された曲がつけられてから、英国教会系の讃美歌集で広く歌われるようになったアドヴェントの讃美歌。

21-231「久しく待ちにし」

Veni, Veni, Emmanuel

1. Veni, veni, Emmanuel / captivum solve Israel, / qui gemit in exsilio, / privatus Dei Filio. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
2. Veni, O Sapientia, / quae hic disponis omnia, / veni, viam prudentiae / ut doceas et gloriae. / Gaude! Gaude! / Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
3. Veni, veni, Adonai, / qui populo in Sinai / legem dedisti vertice / in maiestate gloriae. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
4. Veni, O lesse virgula, / ex hostis tuos ungula, / de spectu tuos tartari / educ et antro barathri. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
5. Veni, Clavis Davidica, / regna reclude caelica, / fac iter tutum superum, / et claude vias inferum. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
6. Veni, veni O Oriens, / solare nos adveniens, / noctis depelle nebulas, / dirasque mortis tenebras. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
7. Veni, veni, Rex Gentium, / veni, Redemptor omnium, / ut salvas tuos famulos / peccati sibi conscios. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!

21-241「来たりたまえわれらの主よ」

O Dieu du clemens

1. O Dieu de clémence, / Viens par ta présence, / Comblen nos desirs, / Apaiser nos soupirs. Sauveur secourable, / Parais à nos yeux, / A l'homme coupable / Viens ouvrir les cieus ; / Céleste victime, / Ferme-lui l'abîme.
2. O bonté divine ! / Dieu vers nous s'incline ; / Du divin amour / Paraît enfin le jour. / Dans une humble étable Il va naître enfant, / Pauvre et misérable, / Dans le dénûment. / Heure d'espérance ! / C'est la délivrance !
3. Un dur esclavage / Fut notre partage : / De tout l'univers / Il vient briser les fers. / Loin de sa présence / Le péché s'enfuit, / Et par sa puissance / L'enfer est détruit ; / A tous sa naissance / Rendra l'innocence.
4. Gloire au divin Maître / Qui bientôt va naître ! / Que nos chants joyeux / Eclatent jusqu'aux cieus ! Que les chœurs des anges / Au divin séjour / Chantent les louanges / De ce Dieu d'amour ; / Et que par le monde / Toute voix réponde :

21-232「神のみ子は世に来られた」

Gottes Sohn is kommen

1. Gottes Sohn ist kommen / uns allen zu Frommen / hier auf diese Erden / in armen Gebärd, / daß er uns von Sünde / freie und entbinde.
2. Er kommt auch noch heute / und lehret die Leute, / wie sie sich von Sünden / zur Buß sollen wenden, / von Irrtum und Torheit / treten zu der Wahrheit.
3. Die sich sein nicht schämen / und sein' Dienst annehmen / durch ein' rechten Glauben / mit ganzem Vertrauen, / denen wird er eben / ihre Sünd vergeben.
4. Denn er tut ihn' schenken / in den Sakramenten / sich selber zur Speisen, / sein Lieb zu beweisen, / daß sie sein genießen / in ihrem Gewissen.
5. Die also fest glauben / und beständig bleiben, / dem Herren in allem / trachten zu gefallen, / die werden mit Freuden / auch von hinnen scheiden.
6. Denn bald und behende / kommt ihr letztes Ende; / da wird er vom Bösen / ihre Seel erlösen / und sie mit sich führen / zu der Engel Chören.
7. Wird von dannen kommen, / wie dann wird vernommen, / wenn die Toten werden / erstehn von der Erden / und zu seinen Füßen / sich darstellen müssen.
8. Da wird er sie scheiden: / seines Reiches Freuden / erben dann die Frommen; / doch die Bösen kommen / dahin, wo sie müssen / ihr Untugend büßen.
9. Ei nun, Herre Jesu, / richte unsre Herzen zu, / daß wir, alle Stunden / recht gläubig erfunden, / darinnen verscheiden / zur ewigen Freuden.

21-240「主イエスは近いと」

Vox clara ecce intonat

1. Vox clara ecce intonat, / obscura quaeque increpat: / procul fugentur somnia; / ab aethre Christus promicat.
2. Mens iam resurgat torpida / quae sorde exstat saucia; / sidus refulget iam novum, / ut tollat omne noxium.
3. E sursum Agnus mittitur / laxare gratis debitum; / omnes pro indulgentia / vocem demus cum lacrimis.
4. Secundo ut cum fulserit / mundumque horror cinxerit, / non pro reatu puniat, / sed nos plus tunc protegat.
5. Summo Parenti Gloria / Natoque sit victoria, / et Flaminii laus debita / per saeculorum saecula. Amen.